

レファレンス コーナー 紅茶から途上国を 知る

鈴木陽子

私たちの生活の中には、発展途上地域が主な生産地となっている一次産品が数多くある。このような商品が貿易という手段によって世界中に運ばれることは、生産国にとっても消費国にとっても、経済の発展に資することとなる。紅茶もそうした一次産品である。

紅茶をはじめとするお茶を嗜む風習はもとはアジア、中東地域を中心に長年営まれていたもので、茶葉の利用に関する記述は紀元前二七三七年に遡るといふ(荒木安正、松田昌夫著『紅茶の事典』(柴田書店 二〇〇二年)。したがって、茶葉の加工法も多岐にわたっており、大きくは、「発酵茶」と「不発酵茶」に二分される。日本茶は不発酵茶である。発酵茶は、さらに、「菌類発酵茶」と「酵素発酵茶」とに分けられ、酵

素発酵茶は、「強発酵茶」と「半発酵茶」に分類される。紅茶はこの強発酵茶に分類される。ちなみに、烏龍茶は半発酵茶である。

このような歴史を持つ紅茶が十七世紀にイギリスに伝えられて、「紅茶文化」が形成され、西欧世界に広まった。事情は前出『紅茶の事典』に詳しい。この『紅茶の事典』の前半は項目目だてによる紅茶関連用語集で、後半では、紅茶をめぐる様々な話題を解説している。

日本における紅茶をめぐる環境は、この一〇年ほどで様変わりした。ひと昔前は、喫茶店はコーヒーと決まっていたようなところがあったが、ここ数年で紅茶専門店の数も増え、缶やペットボトル入りの紅茶が手軽に入手できるようになった。ロイヤルミルクティーという言葉も一般的に使用されている。

紅茶周辺情報を提供している日本紅茶協会ホームページ(<http://www.jrba.org>)によると、世界の紅茶生産高は一九九五年に約一五〇万トン、二〇〇〇年には約一六五万トンで、国別では、インド、スリランカ、ケニア、インドネシアが上位四カ国になっている。日本の紅茶輸入実績を二〇〇五年一月から九月までの累計で見ると、輸入量は、①スリランカ②インドの二カ国で全体の七五%、③インドネシア④ケニア⑤中国の三カ国(四〇〇トン以上)まで含めると九四%になる。しかし、金額で見ると、①スリランカ②イギリス③イン

ド④中国⑤フランス⑥インドネシア(一億円以上のみ)という順番になる。輸入量では全体の三%のイギリスが輸入金額では全体の二七%を占めている。欧米諸国から輸入される紅茶は、高級茶葉を厳選していたり、きれいな器に入れたりして付加価値を高めているために価格が高くなっているといえる。日本の紅茶輸入金額に占める欧米諸国の割合は二〇〇〇年に三%だったものが、二〇〇五年一月/九月累計では三六%と増加傾向にあるが、発展途上地域から直接輸入される紅茶との違いを認識して上手に購入したいものである。

近年、「フェアトレード」という概念が注目されているのをご存知だろうか。もともとは、オランダで一九六〇年代に生まれた概念で、紅茶など一次産品の貿易が生産者側の犠牲に成り立っていることから、「途上国で生産されたものを、労働力に見合った価格で買うことによって、生産者を貧困から救い、経済的・社会的自立を支援する活動」と定義される。紅茶を生産している発展途上地域では、子供たちが学校へ行くこともできずに、茶摘みに駆り出されたり、重労働によって生産されたものが購入者の都合で安く買われたりしている。その結果、貧困が解消されず、教育機会も損なわれるという悪循環が生じている。そこで、「フェアトレード」に取り組む国際組織がいくつも誕生し、フェアトレード商品の規格や認定マークが導入され

た。これらの運動は有機農産物運動とも連携している。国際組織としては、ドイツのボンに拠点がある Fairtrade Labeling Organizations International (<http://www.fairtrade.net/>) があげられる。日本では、フェアトレードジャパン(特定非営利活動法人)が認定などを行っている。他にも、NGO活動の中で、現地から直接紅茶などを輸入・販売することで発展途上地域支援活動を行っている団体が数多く出てきている。バンングラデシュの紅茶農園での教育支援活動について書かれた今西乃子文、浜田一男写真『ほくの夢は学校へ行くこと』バンングラデシュ紅茶畑の軒下教室から(佼成出版社 二〇〇二年)には援助の実際が紹介されており興味深い。

日本貿易振興機構では、アフリカの紅茶産業の育成に力を入れており、『アフリカの台所』アフリカ食品・飲料企業ダイレクトリリーや『ケニア紅茶のおはなし』(どちらも二〇〇五年 WE Bでも公開中)などのパンフレットを発行して、病害虫の心配がないために無農薬で栽培される東アフリカ(ケニア、タンザニア、ウガンダ)の紅茶を紹介している。

紅茶やコーヒーは今や私たちの日々の生活に欠かせない。味わいの中に発展途上地域の香りを感じるようにしたいものだ。

(すぎき ようこ/アジア経済研究所図書館)